

第一章 薔薇の毒、感度実験

ナース 「これより感度実験を開始します」

マリナ 「実験に付き合えば、妹を解放してくれるんでしょうね」

ナース 「私はそのように伺っております」

マリナ 「仕方ない……やるなら、さっさとやりなさい」

ナース 「では、まずおちんぼの勃起実験から参りましょう。マリナ様のおちんぼが、どのような刺激で勃起に至るのか確認させていただきます」

マリナ 「い、いちいち言わなくていいわ」

ナース 「決まり事ですので、ご容赦ください。それでは、開脚をお願いします」

マリナ 「脚を開けばいいのね……ほら、これでいいでしょ」

ナース 「少し足りません。こうです」

マリナ 「んんっ……！ ち、力尽くで広げなくても、言えばわかるでしょ！」

ナース「マリナ様の羞恥心を確認」

マリナ「いまのも実験のひとつだったってわけね……まったく」

ナース「お怒りのところ失礼だと思えますが、おちんぼを触らせていただきます」

マリナ「始まるのね……いいわ、来なさい」

ナース「最初は裏筋を指先で刺激」

マリナ「んっ……んんんっ……あなた、結構手慣れたのね……」

ナース「実験はマリナ様が初めてではありませんから。それよりも、感じているようですから、どう気持ちいいのか教えていただけると助かります」

マリナ「んくっ、んはう……ふ、普通に刺激があるだけよ……」

ナース「まだ余裕があると見て構いませんか？」

マリナ「そ、そうだけど……あっ……ふうっ……」

ナース「では、刺激を強めていきましょう。亀頭をつまむようにいじっていきます」

マリナ「んあああつ……！ あつ……！！」

ナース「喘ぎ声が大きくなるのを確認。裏筋よりも感度が高いようですね」

マリナ「そ、それは……んんっ、もともと……あつ……感感なところだから……っ」

ナース「例に漏れず、亀頭は敏感だということですね。そうなりますと、カリ首も敏感でしようか。おちんぼを握らせていただきます」

マリナ「あああつ……！！ シコシコするなら、そう言つて……あああつ……！！」

ナース「ムクムクしてきましたね。やはり、カリ首を中心にシコシコしごくのが最も効果的ようです」

マリナ「い、言わなくていいから……あああつ、んっ……！！」

ナース「完全に勃起を確認。サイズを測定します」

マリナ「はあはあ……こんなふうに、あれこれ試されるのね……」

ナース「サイズ、測定終了。勃起時、十七センチ。平均を大きく上回るサイズであると判明」

マリナ「きよ、巨根とか言わなくていいのよ……気にしてるんだから」

ナース「そうなのですか。こちらではどうにもできませんので、手コキに移りますね。もちろん、カリ首を中心に」

マリナ「あつ、んっ……んんんう……だから、いきなり始めるんじゃないわよ……あんっ……んう……」

ナース「おちんぼが気持ちよくなれば、そのようなことは気にならないと思うのですが」

マリナ「べ、べつに、んあ……性欲を発散しに、きてるんじゃない……ああ……ないのよ……んんっ……」

ナース「性欲に流されてしまうほど感じてくれたほうが助かるのですが……実験を終えて射精に至らなかった被検体はいませんから、心配ないでしょう」

マリナ（この先、なにが待ってるというの……？）

ナース「怯えた表情を確認……しかし、期待の目でもあったように思えます」

マリナ「き、期待なんて……あああっ……！」

ナース「手コキの速度を加速させていきます」

マリナ「んっ、あっ……ああっ……んつく……!!」

ナース「身をよじり始めましたね。これも記録しておきますが、さらに速度をあげたほうがよさそうですね」

マリナ「い、いまでも、十分速いんだけど……」

ナース「マリナ様には物足りないようですから、さらに激しくします」

マリナ「あっ……!! んあんっ……!! あっ、んっ……!!」

ナース「カウパー線液の分泌を確認。これも絡めておちんぼをシコシコしていきます」

マリナ「使わなくなっついていいでしょ……んあっ、ああっ、んんんっ……!!」

ナース「まだ我慢ができるようですね。このままですと、先生が満足する記録を取れませんか……」

マリナ「んひゃあう……!! ああっ……ヌルヌルして……あああっ……!!」

ナース「もっと喘いでください。私もしっかりと職務を果たしたいので」

マリナ「くうっ、んくっ……あっ、んんっ……出っ張ってるところばかり……んんんっ！」

ナース「ヌルヌルで、にちゆにちゆの状態になってきているのですが、これでも我慢なさいますか……では、手コキ以外の刺激も追加しましょう」

マリナ「手コキ以外って……」

ナース「耳元を失礼します。こちらへの刺激と言葉責めが入ったほうが、マリナ様はお好みかもしれませんので」

マリナ「み、耳で感じるような……んんあ、人間じゃあ、ああう……ないわよ……っ」

ナース「試してみなければわかりません……ああむっ、んちゅっ、じゅるるっ、んじゅっ……れるろろ、れるっ、んれるっ」

マリナ「ああっ、はあああっ、んあああっ、あああああっ……んくうっ……っ！」

ナース「れるっ、んじゅるるっ、れるるるっ、れるっ、んれるっ……だいぶ、喘ぎ声がいやらしくなって参りましたよ……はむっ、んちゅっ、れるるっ、んれるうう」

マリナ「くあああっ、んあああう、はんっ、あああああっ……！ おみみい、あああああっ……っ！」

ナース「れるっ、んちゅっ……やはり、耳にも性感帯がありましたね……はむっ、んじゅっ、れるっ、んちゅっ……だいぶ、変態使用のお身体なようです」

マリナ「だ、誰が変態……んひゃあっ……！ ああ、あ、あっ、んっ、は、はっふう……！」

ナース「かわらしい喘ぎ声ですよ、マリナ様……れるちゅっ、んちゅ、れええるっ……れるろっ……ちゅっ、んじゅっ……！」

マリナ「はあ、あああっ、んああっ！ はふっ、ああっ！ んっ！ あああっ！」

ナース「カウパー線液の分泌が止まりませんね……私の手がマリナ様のいやらしいおつゆに塗れてしまっています……れるっ、んれるっ」

マリナ「くふああっ、あああう……！ そういうのは、言わなく、てもお……はあ、んんっ、ああっ、んあああっ……！」

ナース「しかし、言っ差し上げたほうがおちんぼがビクビクしてくれますから……んちゅっ、ちゅっ……ご自身でも、おちんぼが反応しているのを感じていきますよね」

マリナ「わ、わかる、けどお……あんっ、ひあっ、ひうっ、あああっ……！ わざわざ、申告なんてしない……あっ、んああっ……！」

マリナ（普通に気持ちよくなってる……このナース、結構どころじゃないテクニシャンじゃない……）

マリナ「んあっ、くっ……！ ふああっ、あんっ……っ！ ひあああっ……！」

ナース「いいですね……んちゅっ、れるうっ、れろろろっ……そういうお声を、もっと聞かせてください……先生にもいい報告ができます……んちゅっ、れるっ……そのためでしたら、なんでもしますから……んふうっ、れるうっ……もちろん、感度の高いところを自己申告してもらっても構いませんよ……んう、れろろっ、れろお、じゅるるっ」

マリナ「ああっ、んんっ……！ 私から教えてもらうよりも……あくっ……自分で探し当てたほうが……はあ、はあ……いい記録になるんじゃないの……んくうっ、ああっ……！」

ナース「それもそうですね……では、亀頭にだけ手をかぶせて……」

マリナ「あっ！ あ、んあっ！ ああああっ……！ そ、それっ、ダメえっ……！ おちんちんの先っぽばかり、責めないで……っ！」

ナース「やはりここでしたか……はあむう、んちゅう……あっさり見つかってしまっ拍子抜けですが……んちゅっ、れうえう、れるじゅっ……マリナ様がお好きな、亀さんの頭だけジユクジユクのニルニルにしてあげましょう……ああむっ」

マリナ「ああっ、ひいうっ、ふああっ、あくうう……！ んひっ、はああう……！ おちんちん、ダメっ……！ 亀頭、溶けてなくなっちゃう……っ！」

ナース「気持ちいいからと言って、そんなに暴れないでください」

マリナ「これで、動くなっ言うほうが……」

ナース「まだ、私は本気を出していないんですから」

マリナ「十分、グリグリ手のひらでいじめてきてるじゃない……っ！」

ナース「そう感じていましたか……あむっ、んちゅっ……私はどうにも加減というものがわからないらしく、実験の際は軽めの力加減から始めるように言われているんです」

マリナ「そ、そんなん、で……あああうっ！ よく、ナースが……ふうう……務まる、はあはあはあ……わねえ……んはっ、はああう、んああっ……！」

ナース「あいにく、患者さんには受けがいいんです。マリナ様にも、して差し上げましょう。普段通りの私の力で」

マリナ「ああああああっ！ んあっ！ んくっ！ んああっ！ あああああっ！ おちんちん……おちんちんがあ……っ！」

ナース「おちんちんが、どうしましたか？」

マリナ「ダメダメダメダメダメっ！ おちん、ちん……あああああっ！ 壊れ、ちやう……はあ、んあっ、あああああっ！！」

ナース「ご心配には及びませんよ。この程度で、おちんぽは壊れたりしません」

マリナ「そ、それが、事実だとしてもお……ひああっ、あああっ、んあああう、あっくううう……っ！ 私にとっては……壊れちやうくらい……し、刺激、が……強く、て……っ！」

ナース「腰が浮いてしまいましたね。陰囊がキュッと締まって、身体が射精の準備をしようとしているようです」

マリナ「だから、いちいち解説は……んああっ！」

ナース「そろそろいいでしょうか。記録をしないと、忘れてしまいそうですし」

マリナ「はあ、はあ、はあ、はあ……終わった、の……？」

マリナ（快感地獄から、ようやく解放された……これで、妹を解放してもらえる……）

ナース「では、ここまでの記録も終わりましたので、尿道に薔薇の毒を注入しましょう」

マリナ「はあっ……!!? 薔薇の毒……!!? ま、待ちなさい……尿道につて、どういふ……」

ナース「こういうことです」

マリナ「あああああああっ……っっ!! お、おちんちんの中に、入って……っ!!」

ナース「この薔薇の毒には媚薬効果があります。ですから、マリナ様はいまから敏感になって、おちんぼがもつと気持ちよくなってしまいます」

マリナ「ぬ、抜いて……いますぐ、この変な器具を抜いて……っ!!」

ナース「変な器具ではありません。薔薇の毒を注入するための、立派な医療器具です」

マリナ「十分、変な器具よ……っ! ああああっ! んんんっ! ああああああっ!」

マリナ（どんどん入ってくる……身体も熱くて……）

ナース「規定量の注入が終わりました」

マリナ「はあ、はあ、はあ……」

ナース「注入が終わりましたので、再び手コキに移ります。あ……私は手袋をはめさせてもらいますね。ここからは、手袋手コキになります。きつと、亀頭が特別敏感なマリナ様なら好きなはずです。では、失礼して……」

マリナ「あああああっ！」

ナース「握っただけで、この喘ぎ声ですか。薔薇の毒との相性もいろいろですね」

マリナ（触られただけなのに、おちんちんがビクビクしちゃう……）

ナース「シコシコしていないのに、カウパー線液まで出てきていますよ。薔薇の毒があまり逆流しないといいますが」

マリナ「はあはあ……私に言われても……あなたが注入した変な薬のせいで、こうなってるんだから……はあはあはあはあ……」

ナース「マリナ様」

マリナ「なによ……」

ナース「あまり興奮なされると、必要以上に手が動いてしまう可能性があります。淡々と責めるからこそ実験に重用されている身ですので、興奮されるのは困ります」

マリナ「させてるのは、そっちでしょう……」

ナース「決して、そこまで『はあはあ』させようとは思っていなかったのですが……仕方ありません。平常心での手袋手コキを心がけましょう」

マリナ「くあっ！ ああっ！ んあああっ！ ああああっ！ はあっ！ あああっ！ らめえ……おちんちん……いじらないでえ……！」

ナース「カウパー線液のさらなる分泌を確認。最早、わざわざすくい取るまでもないほど濡れています。礼儀として少し搾っておきましょう。根元をギュッと締めて、先っぽまで……」

マリナ「やめ、てえ……あああああっ！」

ナース「やはり、たっぷり出て来ましたね。薔薇の毒の逆流量も許容範囲です。これを指先と手のひらにクチュクチュ絡めて……マリナ様がお好きな、カリ首を中心にしごいていきますね」

マリナ「んくっっ！ はああっ！ あああっ！ ひあう！ んあっ！ あああう！ も、もう限界、だからあ……はあはあ……つつくうっ！」

ナース「その割には、腰も浮いていませんよ」

マリナ「そんな力すら残っていないだけよ……ほお、ほお……」

ナース「そうでしたか、失礼しました。では、射精されてしまう前に、また耳の方も刺激させてもらいましょう……ああむっ、んちゅっ、れるっ、れるるるるっ！」

マリナ「あああっ！ んくっ！ ああっう！ んんんっ！ おちんちんだけでも、限界なのに、耳までえ……ひいひいひい……っ！ それ、に……っくっ……勢いがよくなってるし……あなた、絶対に楽しんでるでしょう……っ！」

ナース「あくまでも、指示された通りの実験をしているだけですよ……れろろろろっ、れるっ、んれるっ……平常心は保っているはずですよ……れるちゅっ、ぢゅりゅりゅっ、ぢゅりゅりゅりゅっ！」

マリナ「嘘よ……っ！」

ナース「マリナ様は、そう思われるのですね。ですが、私は興奮を抑えられていますよ……はむっ、んちゅっ、れろっ、れるるっ、れろろろろっ……もしかすると、薔薇の毒の効果で私が興奮しているように感じているのかもしれない……はぶっ」

マリナ（射精したい……でも、このナースのことだから、出そうとすれば焦らしてくるはず……我慢しかない……）

ナース「れるっ、んれるっ……れるっ、れろろろっ……！ マリナ様のお耳は、これま
でのどの被検体よりも感度がいいですね……んれるっ……これなら、先生も喜ぶ
でしょう……はあむっ、んちゅっ、れるう……！」

マリナ「そ、その先生とやらは……あああう！ どこまで実験すれば、気が済むの……
はあ、はあ……あなたとしても、ほお、ほお……先生が満足する記録が取ればいいんで
しょう……」

ナース「ぢゆるるるるるるっ……んぷあっ……極論を言えばそうなりますが、よりたく
さんの記録があったほうが喜びますから……あむっ、んじゆるっ、れるるるるっ！」

マリナ「そん、なあ……はあはあ……だったら、射精させて……射精すれば、終わるんで
しょ……」

ナース「そうですね。私に課せられた仕事は射精までですから」

マリナ「じゃあ、射精してあげるから……そこを細かく記録に取りなさい……それで、終
わる、でしょ……んああっ、あああう……！」

ナース「勝手に射精するのですしたら、もっとキツイ実験をすることになります」

マリナ「くっ……！！」

マリナ「やっぱり、そうなのね……でも、こんな気持ちいいの、耐えられない……おちんちんが、射精したいってずっと叫んでるみたいだし……」

ナース「わかっていただけたようですね。しかし、私も記録を残したいので、次の手を打たせてもらいましょう。ひとさし指をパツクリ開いている鈴口にねじ込むようにして……」

マリナ「あああああ……！　そこは、刺激しちゃ、らめな、ばしょお……！」

ナース「この状態で、亀頭だけグチュグチュしますね」

マリナ「あつ、あ、んっ、あつっ、はあつ、んんんっ！　らめえ……出ちやう、出ちやう……っ！　それ、出ちやうからあ……！」

ナース「いいお声です。もっと聞かせてください」

マリナ「いいとか、言われ、てもお……ああ、ああんっ、んんっ、んっ……んおっ、おおっ……ほお、ほお……こっちは、出ちやいそう、なのにい……」

ナース「快感に身をよじって『出ちやう』と繰り返すマリナ様、すごく素敵ですよ。しっかりと、記録に残しますね」

マリナ「残さなくて、いい……んあっ！　ああっ！　らめっ、らめっ……！　もうっ、も

うっっ……!!」

ナース「では、竿の方をシコシコする形に変えましょう」

マリナ「な、なんで……っ!!」

マリナ（出せると思ったのに……ナースに責められて射精すれば、終わりなのに……）

マリナ「いじわる、しないで……出そうだったんだから……」

ナース「それでは、マリナ様を喜ばせるだけになってしまいます。あくまでも、私が喜ばせたいのは先生ですから。しかし、竿をシコシコするのも、いまのマリナ様にはかなり効くと思いますよ?」

マリナ「そ、そう、だけどお……」

ナース「それに、心のどこかではもっとシコシコしてほしいと思っているはずですよ。これまでの被検体もそうでしたから」

マリナ「ま、間違っても……おとおっ! んおっ! そんなふうには……はあ、はあ……いやあ……!! 出りゅっ、出りゅっ……!!」

ナース「やはり、これでも射精しようになりますね。もっと、クチュクチュのニルニルニユ

ルにしてあげますよ」

マリナ「あああああっ……！！んああああっ！」

ナース「このぶんですと、根元のほうをしごいただけでも出そうですね」

マリナ「はあはあはあはあ……っ！」

マリナ（先っぽお……先っぽが一番いいの……っ！）

ナース「マリナ様の物欲しそうな顔が確認できました。ご所望通りの先っぽを、いまからいじって差し上げますよ。記録は十分に取れましたから、もう焦らすことはありません」

マリナ「ほ、本当でしょうね……」

ナース「約束しましょう。その代わりに、刺激が強めになるのは覚悟してください」

マリナ「んんんんっ……！！あ、あっ、んあう、あああああっ！」

ナース「身体がのけ反っていますよ、マリナ様」

マリナ「だって、だって……亀頭があ……あああああっ！」

ナース「もう射精しているのではないかと思うほど震えていますね」

マリナ「らめえ……おかしくなりゆう……らめらめっ……むりい、もう無理い……出ちやう、出ちやうっ……イクっ、イクイクっ……！」

ナース「焦らしはしませんが、いまが一番気持ちいいところですよ」

マリナ「我慢しろって、言う、の……ほおほお……っ！」

ナース「実験に付き合っていたらいるお礼みたいなものです」

マリナ「そんなお礼、いら、にやい……もうイクっ……イクって言ったら、イクのお……ほおほおほお……っ！」

ナース「では、射精なさってください。いいですよ」

マリナ「イクっ……おちんちんイクっ、おちんちんイクっ……！ 出りゆ、出りゆう、出りゆう……！ イっちやうううううううううっ！！ ああああああっ……！」

ナース「んっ……射精を確認。勢いよく出ていますよ」

マリナ「はあはあはあはあっ……んんんっ！」

ナース「顎の反り、背筋の反り、足先の力みを確認」

マリナ「いやああっ……ああああっ……射精、止まらにやいい……っ！」

ナース「想定量以上の射精です。やはり、薔薇の毒との相性がいいからでしょう」

マリナ「はあはあはあ……こんなに出るの、初めて……」

ナース「そうですね。薔薇の毒がなければ、こんなには出ないでしょう」

マリナ「大変なときに言われる正論ほど、腹立たしいものはないわね……はあ、はあ……」

ナース「事実ですから」

マリナ「事実だとしても……っ！」

マリナ（でも、気持ちよかった……こんなに気持ちいい射精も初めて……出るまでが地獄だったけど……）

ナース「では、射精が終わったようなので……」

マリナ「なっ……またおちんちんを握って……なにをする気なの……」

ナース「尿道に残っている精液を搾り上げます。カウパー線液を絞ったときと同じ要領です
ね」

マリナ「んんんんつつつ！！ い、いまは、特別敏感なんだから……っ！！」

ナース「ドロっとした精液が出てきていますよ。薔薇の毒と私の手コキで、精巢が張り切った証拠ですね」

マリナ「ああああ……っ！ 早く、終わりにして……っ！！」

マリナ（死ぬ……死んじやう……おちんちん、感じすぎ……っ！）

ナース「ここは重要ですから、力を入れてじっくり搾りますよ」

マリナ「あああああ……っ！！」

ナース「カリの出っ張りにも指を這わせて……」

マリナ「んあああああ……っ！！」

ナース「終了です」

マリナ「はあはあはあ……これで、全部終わりよね……」

ナース「私に課せられた実験は終了……おっと、まだ精液が滲み出ていますね。搾り損ねたようですから、もう一度搾ります」

マリナ「ま、待ちなさい……どれだけ絞っても、少しは残る……んんっ！」

ナース「まだ残ってましたね。先ほどと同じように力を入れていきますよ」

マリナ「あああああっ！！　すぐに、終わらせて……っ！」

マリナ（このナース、本当に加減を知らないのね……っ！）

ナース「んっ……これで搾り取れたでしょうか。すっかり、おちんぼの周辺がドロドロですね。とっっても淫靡でございます」

マリナ「言われなくても、わかってるわよ……」

マリナ（終わった……これで、妹を助けてあげられる……その前に、ちゃんとキレイにしておかないと……こっちが心配かけちゃいけないし……）

ナース「ありがとうございます、マリナ様。おかげで、いい実験記録になりそうです」